頁

(15) 三段とは物語が上中下の三つに別れていることであり、六段の場合は一から六までの区切りがある。

(16) 絵巻「をくり」の詞章部分については、同作を描いたのが岩佐又兵衛（一五七八―一六五〇）であれば、江戸に移住する寛永十四年（一六三七）以前の福井時代であることが考えられる。岩佐又兵衛は摂津国に生まれ、四十歳の頃に北の庄（現福井市）に移る。この地で「山中常盤物語絵巻」、「浄瑠璃物語絵巻」など、絵巻「をくり」と同系統の古浄瑠璃絵巻を制作した。

(17) 上は冒頭三丁及びその他の箇所が欠け、中・下も後半部が欠けている。

(18) 『まつら長じや』には太夫名未詳・うろこかたや孫兵衛板のものもあり、本地語りに近いものが備わっているが、寛永初年頃の板行ではないかとされるが不確定なため省いている。

(19) ケンブリッジ大学図書館に所蔵される同書は、横山重によれば貞享二年三月に鱗形屋で刊行したものが原刻本で、それを元禄十年頃に挿絵を省いて油町山形屋が出版したのではないかと述べる。最終部刊記には「丑　三月吉日　油町　山形屋新板」とあり、丑とは延宝元年葵丑、貞享二年乙丑、元禄十年丁丑のいずれかであり、原板は貞享二年乙丑の可能性を指摘し、これを十二年後の元禄十年丁丑に刊行し「丑」の文字を残したのではないかとする（横山重編『説経正本集』第三一九六八　角川書店　五一三―五一四頁）。

(20) 信多純一・阪口弘之校注『古浄瑠璃 説経集』一九九二　岩波書店　一六〇―一四六頁

(21) 横山重編『説経正本集』（全三巻）には、四十六編の正本を掲出し、各巻それぞれに「附録」として、絵巻や奈良絵本の詞章部分や読み物化したもの計二十編を収録している。

(22) 『説経正本集』第一の附録に収載されており、「附録解題」によれば筆写年代は室町時代末期と推定し、操り芝居にのせる以前の古い本文の形を継承した写本と述べる（横山重編『説経正本集』第一　四〇二―四三五頁）。

(23) 室木弥太郎校注『新潮日本古典集成　説経集』一九七七　新潮社　四一二頁

(24) 山本吉左右「説経節―説経と傘―」『国文学 解釈と鑑賞』第五十巻六号　一九八五　至文堂　七三頁

(25) 『色道大鏡』には「操にする説経のふしも、当時は浄るりにちかくなりたり」と記される（前掲書（6）に同じ。新版色道大鏡刊行会編『新版　色道大鏡』二三五頁）。

（ないとう・ひさよし／神奈川大学非常勤講師）

「創作アイヌ伝説」の作成過程
―「シトナイ伝説」の事例―

日辻　よう子

はじめに

一般向け刊行物などで「アイヌの伝説」として次のような話が紹介されることがある。「年に一度、生贄に少女を求める大蛇がおり、断ると害をなすので村人が困り果てていたところ、ある少女が自ら生贄に志願した。少女は猟犬とマキリ（アイヌ民族の小刀）で大蛇を退治した」といった話である。この伝説は執筆者によって呼称もさまざまであるが、橋本尭尚による小説で主人公に「シトナイ」という名前が付けられて以降、シトナイという少女が登場するようになって現在に至るので、本稿では「シトナイ伝説」と呼ぶことにする。

二〇一八年七月十八日スマートフォン用ゲームアプリ『Fate/Grand Order』[1]にて「シトナイ伝説」を元にして作られたゲームキャラクター「シトナイ」が発表された。このことを契機に、同月には国内外のインターネットユーザー達から「シトナイ伝説」が四世紀の中国の干宝が著した『捜神記』と似ていると指摘する声が出た[2]。

「シトナイ伝説」と『捜神記』の類似を指摘する声は以前よりあった。脇哲『新北海道伝説考』昭和五十九年（一九八四）は「『捜神記』の一篇でしかなかった。直訳といってもよい[3]」と述べている。筆者も「シトナイ伝説」がアイヌの伝承と見てよいのか疑問に思ったが、その出自や生成過程は不明であった。今回調査した結果、出典がほぼ確認できた。「怪しげなアイヌ伝説」はなぜ存在するのか、その構造的な問題について報告したい。

一．刊行物から見る「シトナイ伝説」

筆者が調べた限り、「シトナイ伝説」がアイヌの伝説として採用された例は、最も古い大正十三年（一九二四）青木純二『アイヌの伝説と其情話』から平成三〇年（二〇一八）『Fate/Grand

Order』まで九例見つかった。年代順に並べると次の通りとなる。なお、「　」内は当該刊行物等における「シトナイ伝説」のタイトルである。

①青木純二『アイヌの伝説と其情話』一九二四年 富貴堂書房「大蛇を殺した娘」

②札幌放送局『北海道郷土史研究』一九三二年 日本放送協会北海道支部「小樽の昔噺」

③北海道庁『北海道の口碑伝説』一九四〇年 日本教育出版社「大蛇を殺した娘」

④高島尋常高等小学校『高島町史』一九四一年 高島尋常高等小学校「赤岩の大蛇」

⑤藤沢衛彦 二反長半（編著）『少年少女日本伝説全集』一一九六一年 東京創元社「酋長のメノコ、シトナイ」

⑥二反長半『少年少女日本の民話・伝説』八「コタンの大蛇：小人のコロボックル ほか」一九六三年 偕成社「コタンの大蛇」

⑦北海道口承文芸研究会『北海道昔ばなし 道央編』一九八九年 中西出版「大蛇を退治したシトナイの話」

⑧高田紀子『伝説は生きている：写真で見る北海道の口承文芸』二〇〇七年 北海道新聞出版局「赤岩の大蛇とシトナイ」

⑨TYPE-MOON / FGO PROJECT『Fate/Grand Order』二〇一五年オンライン配信開始 株式会社アニプレックス「シトナイ」（ゲームキャラクター）

先に記載した資料の中で出典を明記しているのは『高島町史』と『北海道昔ばなし 道央編』のみで、それぞれ青木純二『アイヌの伝説』と北海道庁『北海道の口碑伝説』を出典としている。

北海道庁『北海道の口碑伝説』は北海道の各地の伝説、社寺、史蹟についてまとめた書籍である。刊行当時、道内市町村、学校、諸官庁に頒布されていた。[4] 表題に「口碑」とあるが、収録された地域の事物はそれぞれの地域の役場が調べたと記しており、アイヌ民族に関する伝説はほぼ全てその出典を記されていない。

「大蛇を殺した娘」についても「小樽市役場調」と記されているだけで著者について言及されていない。しかし、文章が酷似しているので先に出版された青木純二『アイヌの伝説と其情話』が引用元と思われるので以下に記載する。

【A】青木純二『アイヌの伝説と其情話』より「大蛇を殺した娘」（一九二四年）[5]

小樽手宮の山の西北の裂け目に昔大蛇が棲んで居つた。長さ七八丈、大さ十圍（かこえ）もあつて、村人に怖がられ、喰はれて死ぬ者も多かつたので、村人たちは牛羊を供へて、祭りをして見たが、何の効もなかつた。

その大蛇が、人の夢枕に立つて、十二三歳の無垢の乙女を喰ひたいといつたとやらで、村人たちも持て餘して居つた。

しかし相變らず害をするので、已むを得ず、賤しい者の子や、罪ある家の子などを貰ひ受けて養ひ置き、八月になると、祭りをして大蛇の穴の處へ其の兒を送ることにした。すると大蛇が出て來て呑んで了うといふ風で、年々それが例となり、すでに九人の乙女を供へましたが、十人めの乙女が入用となつて、それを募り探すことになつた。

イワナイの酋長には、男子が無くて、六人の女兒が居つだ。その年若い女兒が自分で犠牲にならうと申し出た。

父母は許さう筈もないのに、娘が言ふには『家には、不仕合で、男の子が一人も無くて、女の子ばかり六人も有ります、有つても、無いと同様かと存じます。女の子では、御兩親の爲めに何の御役にも立たず、此方から御助け申し上げられないばかりではなく、衣食の程も無益であり、生きて居る効もございませんから、早く死にたいと存じます』と意外な覺悟を聞いて、父母は尙更手離しかね、娘の願を許さなかつた處、娘は家を脱け出して募に應ずるといふ始末、とても思ひ止まらせる譯にゆかない。

かくて娘は、いよ〳〵犠牲となることに決まりましたが、思ふ仔細ありと見え、切れ味良きマキリと蛇を咋ふ犬とを請ひ受けることにした。

八月となつた。娘は大蛇を祭る廟に入り、懐には劍を忍ばせ、猛しき犬を据え、先づ鹿の肉を穴の口へ供へた。

やがて這ひ出る大蛇のいきほひ、頭は困（まるぐら）ほどもあり、眼は二尺の鏡の如く、穴の口なる肉の香を嗅ぎ、これから先へと啗ひつく、様子を篤と見すまして、乙女はこゝぞと犬を放つた、

必死の猛犬に噛みつかれて、急所の痛手堪へ難く、さしもの大蛇も、苦るし氣にのたうつて、とう〳〵醜き亡骸を曝した。

娘は、大蛇の穴を探り、前は喰はれた九女の髑髏を取り出して、言葉も荒く『如何に女の身なればとて、氣の毒にも大蛇に喰はれるとは、弱いにも程があります』と、叱り氣味に言ひ放ち、其のまゝゆる〳〵歸つて來たといふ。

【A】と『北海道の口碑伝説』を比較してみると、ほぼ同一の文章である。だが、青木が『北海道の口碑伝説』の執筆に関わったとは記されていない。一方で青木による【A】にもいつどこで誰から聞き取った伝説なのかを明記していない。つまり、どちらによっても「シトナイ伝説」が小樽のアイヌの伝承なのかどうかを確認することはできない。

参考までに、類似した文章を具体的な数字で算出することができるアプリケーション『文章類似度算出（速攻ハック版）』[6]を用いてみると八八・八〇パーセントの類似性を示した。

二、『捜神記』について

生贄を求める怪物を退治する話は世界中の神話や伝承、創作物に見られる。ヨーロッパではいわゆる「ペルセウス・アンドロメダ型神話」が、日本では「ヤマタノオロチ伝説」などに見られる「大蛇退治」と「美作國神依猟師謀止生贄語」や「早太郎説話」などに見られる「猿神退治」がその類型だろう。

「大蛇伝説」は怪物が大蛇であること、「猿神退治」は援助者が犬であることが「シトナイ伝説」と似ているが、どちらも主人公は男性であり、生贄にされた娘と結婚する事もなければ、怪物が改心する事もなく、主人公が怪物退治の褒美を得る事もない。

脇は『捜神記』が怪物退治において例外的に主人公が幼い少女であり、その点が「シトナイ伝説」と共通していると指摘し、さらに物語自体が『捜神記』の「直訳といってもよい」[7]と指摘している。

脇やインターネットユーザー達によって「シトナイ伝説」との類似が指摘された『捜神記』は四世紀の中国東晋で干宝が著した志怪小説集のことである。その十九巻に「李寄斬蛇」があり、この小説が「シトナイ伝説」と似た話だという。以下、『捜神記』原文を記載する。

【B】干宝『捜神記』より「李寄斬蛇」[8]

東越閩中有庸嶺高數十里其西北隙中有大蛇長七八丈大十餘圍土俗常懼東治都尉及屬城長吏多有死者祭以牛羊故不得福或與人夢或下諭巫祝欲得啗童女年十二三者都尉令長並共患之然氣厲不息共請求人家生婢子兼有罪家女養之至八月朝祭送蛇穴口蛇出呑嚙之累年如此已用九女爾時預復募索未得其女將樂縣李誕家有六女無男其小女名寄應募欲行父母不聽。寄曰父母無相惟生六女無有一男雖有如無女無緹縈濟父母之功既不能供養徒費衣食生無所益不如早死賣寄之身可得少錢以供父母豈不善耶父母慈憐終不聽去寄自潛行不可禁止寄乃告請好劍及咋蛇犬至八月朝便詣廟中坐懷劍將犬先將數石米餈用蜜麪灌之以置穴口蛇便出頭大如困目如二尺鏡聞餈香氣先啗食之寄便放犬犬就嚙咋寄從後斫得數創瘡痛急蛇因踊出至庭而死寄入視穴得其九女髑髏舉出咤言曰汝曹怯弱為蛇所食甚可哀愍於是寄女緩步而歸越王聞之聘寄女為后拜其父為將樂令，母及姊皆有賞賜自是東治無復妖邪之物其歌謠至今存焉

脇は【A】青木が【B】『捜神記』を直訳し、換骨奪胎したと指摘したが、おそらくそうではない。青木は松井等の「妖蛇」『伝説之支那』（一九二二）を参考にしたと思われる。次に記載する。

【C】松井等『伝説之支那』より「妖蛇」（一九二二年）[9]

東越に庸嶺といふ高山があります。その西北の裂け目に大蛇か褄んで居りました。長さ七八丈、大さ十圍もあつて、土地の人に怖がられ、喰はれて死ぬ者も多かつたので、役人たちが牛羊を供へて、祭りをして見ましたが、何の効もありません。

その大蛇が、人の夢枕に立ち、或は巫女の口を借りて、十二三歳の無垢の乙女を喰ひたいといつたとやらで、役人たちも持て餘して居りました。

然かし相變らず害をするので、已むを得ず、賤しい者の子や、罪ある家の子などを貰ひ受けて養ひ置き、八月になると、祭りをして大蛇の穴の處、其の兒を送ることにしました。すると大蛇が出て來て呑んで了うといふ風で、年々それが例となり、すでに九人の乙女を供へましたが、十人めの乙女が入用となつて、それを募り探すことになりました。

將樂縣の李誕の家には、男子が無くて、六人の女兒が居りました。その年若の女兒に名は寄といふものがあり、其の兒が、自分で犠牲にならうと申し出ました。

父母は許さう筈もないのに、寄が言ふには、「家には、不仕合で、男の子が一人も無くて、女の子ばかり六人も有ります。有つても、無いと同様かと存じます、女の子では、御兩親の爲めに何の御役にも立たず、此方から御助け申し上げられないばかりではなく、衣食の程も無益であり、生きて居る効もございませんから、早く死にたいと存じます。私の身を御賣りになれば、少しばかりの御錢が入つて、御助けの端にもなりませうから、いつそ然うして下さいまし。」とは又意外な覺悟を聞いて、父母は尚更手離しかね、寄の願を許さなかつた處、寄は家を脱け出して募に應ずるといふ始末、とても思ひ止まらせる譯にゆきませんでした。

寄は、いよ〳〵犠牲となることに決まりましたが、思ふ仔細ありと見え、切れ味良き劍と蛇を咋ふ犬とを請ひ受けることにしました。

八月となりました。寄は大蛇を祭る廟に入り、懐には劍を忍ばせ、猛しき犬を据え、先づ山盛りの餅へ甘たるい麩を ふりかけて、穴の口へ供へました。

やがて這ひ出る大蛇のいきほひ、頭は困ほどもあり、眼は二尺の鏡の如く、穴の口なる餅の香を嗅ぎ、これから先へと啗ひつく、様子を篤と見すまして、乙女はこゝぞと犬を放つ。

必死の猛犬に嚙みつかれて、急所の痛手堪へ難く、さしもの大蛇も、苦るし氣にのたうつて、とう〳〵廣庭に醜き亡骸を曝しました。

乙女は、大蛇の穴を探り、前に喰はれた九女の髑髏を取り出して、言葉も荒く「如何に女の身なればとて、氣の毒にも大蛇に喰はれるとは、弱いにも程があります」と、叱り氣味

に言ひ放ち、其のまゝゆる〳〵歸つて來ました。
越王はこれを聞き傳へて、彼の乙女を召して后とし、その父を將樂縣令に任じ、母や妹にも、それ〴〵褒美を與へましたが、その後は、東越の地方に怪物が居なくなりました。今も、其の事が謠に遺つて居ります。

【C】松井訳と【A】青木を比較してみると、地名や人名の違い、ですます調とである調の違い、エピソードの削除（【A】青木には身売りを申し出る話しと立身出世話が削除されている）以外、文章が酷似している。参考までに『文章類似度算出』を用いると八三・七六パーセントの値を示した。

【C】が収録された松井の『伝説之支那』は大正十一年（一九二二）に出版されているが、中国文学者の勝山稔は「当時殆ど試みられていなかった口語訳」[10]であったと指摘している。書き下し文ではない漢文の口語訳と【A】青木がここまで一致するのは偶然ではないだろう。【C】松井訳は【B】捜神記から削除した部分があり、その部分は【A】青木の描写と一致する。

【B】捜神記、【C】松井訳、【A】青木を比較して見られる大きな四点の相違を以下に記載する。【B】捜神記の翻訳は竹田晃訳を参考として使用した。[11]

①【C】【A】では父を救うために娘が身を挺したという故事「緹縈救父」のエピソードが削除されている。

【B】捜神記「女無緹縈濟父母之功」

②【A】では中国の穀物庫が描写されている。「囷」とは王禎『農書』[12]によると丸い穀物庫を指す。付図には円筒形の建物が描かれており、いわゆるタワーサイロのような姿をしている。日本文化の蔵もアイヌ文化の蔵も四角い形をしており、円筒形ではない。この描写は北海道庁『北海道の口碑伝説』では描写そのものが削除されている。

【B】「頭大如囷」

【A】【C】「頭は困ほどもあり」

③【A】【C】では、娘が大蛇の後ろから切り付ける描写が削除されている。

【B】「寄從後斫得數創瘡痛急蛇因踊出至庭而死」

竹田訳では「寄はうしろから切りつけ、数ヵ所に傷を負わせた。痛みに耐えかねて、蛇はのたうちながら穴からおどり出し、廟の前まで来て死んだ」と訳している。

④【C】松井訳では寄は「如何に女の身なればとて～」という台詞を言う。松井の創作性が垣間見える翻訳である。しかし、【A】青木の娘も一字一句違わない台詞を言う

【B】「汝曹怯弱為蛇所食甚可哀愍」

竹田訳では「あんた方は弱虫だから蛇に食べられてしまったのよ。ほんとうにお気の毒なこと」と訳している。

これらを以って青木による「シトナイ伝説」は「李寄斬蛇」の翻案ではなく、松井訳の引き写しであると指摘する。これは「大工と鬼六」について櫻井美紀が述べたような「外国種子の書承が日本の風俗に溶け込み口承となった変貌の道」[13]とは異なり、「シトナイ伝説」は、青木の書承がアイヌ文化に受容された例は無く、またアイヌ文学に『捜神記』が受容された経緯もない。

二．一．青木純二と「伝説」

本稿では大正十三年（一九二四）に札幌の富貴堂から出版された青木純二『アイヌの伝説と其情話』を引用しているが、大正十五年（一九二六）に東京の第百書房から『アイヌの伝説』が、昭和四年（一九二九）には東京の成光館から『民族性の研究―アイヌの傳説』という書籍が出ている。これら三冊について阿部敏夫は「「民族性の研究」の部分は納武津著になっていますがアイヌ民話集については前二書と同じ」[14]と述べている。

異版二冊は内容こそ違いは無いが、表題から「其情話」を排し「アイヌの伝説」として販売流通していたようだ。

青木純二（一八九五～没年不詳）は『日本新聞年鑑　大正十四年版』によると、「東京朝日新聞高田通信部主任。福岡市外千代町（明二八、六、一〇）生。高等商業學校三年まで。福岡毎夕主筆函館日日、高田新聞、新潟毎日等を經て東京朝日に入社、著述『アイヌの傳説』外五種」[15]とある。

青木は『アイヌの伝説と其情話』のはしがきに「こゝに集めた『アイヌの傳説と其情話』とは、大部分は『婦人公論』『淑女畫報』『大阪朝日』その他の諸新聞雑誌に発表したもの〔中略〕あらゆる傳説研究書を讀破し、その上、親しくアイヌ部落を訪ふて古老たちに聞いた話ばかりなのである」と記している。しかし、出典が明記されているものは三話のみで、それらは先に記載した新聞雑誌ではなく、朝日新聞社が出版した『山の伝説と情話』と『海の伝説と情話』の二冊からであり、かつ、この書籍は新聞社が募集した創作小説集である。

「シトナイ伝説」のように、中国文学の翻訳小説から引き写した小説について青木が出典を明記できないのは自明だが、前年に出版された知里幸恵の『アイヌ神謠集』からの六話の出典を明らかにしていないのは何故だろうか。[16]

アイヌの伝説に限らず、「伝説集」とは「事実」を編集した出版物とも言えるだろう。現著作権法では地域に伝承される伝説を著作物と見做さない。[17]「伝説」が明確な著者を持たない性質上、誰の創作性も有さない「事実」であるとすれば著作権が存在しないパブリックドメイン、いわゆる「フリー素材」と見做されていたのではないだろうか。

青木のアイヌ民族やアイヌ文化に対する姿勢は「滅びゆく人達の、ありし世の生活」と述べているように、「滅びゆくアイヌ民族」という憐憫の眼差しを以って「古のアイヌの伝説」を蒐

集していたようだ。

三．「シトナイ」の登場

「シトナイ伝説」が今日に至るまで様々な媒体で語られてきた最大の要因は「シトナイ」という名前にあると筆者は指摘する。一章で示した「シトナイ伝説」九例の内、北海道庁『北海道の口碑伝説』と、【A】青木の二例を除いた全てに「シトナイ」の名前が登場する。

主人公の少女の名を最初に「シトナイ」としたのは札幌放送局『北海道郷土史研究』昭和七年（一九三二）に収録された橋本 尭尚（はしもとぎょうしょう）「小樽の昔噺」第二話だと思われる。以下に記載する。

【第二話】橋本尭尚「小樽の昔噺」（札幌放送局『北海道郷土史研究』（一九三二年））より[18]

尚一つ伝説の御話しを致します。小樽の西北一里位祝津の海岸に赤岩山といつて其名の如く茶褐色の岩が重り合つてゐる岩窟があります此岩窟に白龍大權現が祭つてあります。此邊の人々は大に崇敬して居ります。此處に參詣するには銕の梯子や銕の鎖に倚つて辛うじて登る危檢を冒さなければ到達することが出来ません。昔この洞窟に大蛇が棲んで居た長さ七、八丈胴の太さ二斗樽位あつた。部落の人々は怖れて此山に近寄るものがなかつた。此大蛇のために喰はれてしまふ者が多かつた。村人は其大蛇の怒りを恐れ、熊や鹿などを供へて祭りをして見たが何の効もありません。或夜此大蛇が村人の夢枕に立つて十四五歳の無垢の處女を喰たいとやら云ふたので持て餘して居つた。

併し相變わらず害をするので止むを得ませんで、互に相談の上籤を引いて當つた家の處女を八月になると祭をして大蛇の穴の所へ其娘を供へることにした。すると大蛇が出て來て呑んで了うと云ふ風で年々それが例となりまして、已に八人の處女を供へましたが九年目の夏も來り八月の祭りには九人目の處女を供へねばなりませんで、彼處此處と探すことになりましたが此附近にはありませんで困つて居りました。茲に余市のアイヌ人の酋長に「ウヘレチ」と云ふものがありました。男の子がなくて九人の女兒がありました。その九人目の女の子名は「シトナイ」と云ひ年十五歳で頗る「ピリカ」即ち美人でした。その處女が赤岩山の人身供の事を聞きまして自分が其犠牲にならふと父母に申し出でました。

父母は許さう筈もないのに娘「シトナイ」の言ふに我家には不幸で男兒がなく女の子ばかり九人あつても何んの役にも立ちません。無いも同然です。生きて居る甲斐もありません。聞けば祝津の「コタン」では赤岩山の祭りも近附いたが大蛇に供へる娘がないので困つてゐるとのことです。私が其人身供になつて其「コタン」の人々を救ひたいと思ひます。何卒許して下さいと云ふ、意外の覺悟を聞いた父母は祝津「コタン」の人々の為めになるものならば許してもよいと云ひ放ちました。

かくて娘の「シトナイ」は其犠牲となることに極りました。娘の「シトナイ」は思ふ仔細ありと見へ父に乞ふて切味良き「マキリ」と父が獵につれ行く犬を借り受けました。

いよ〳〵八月十五日赤岩山の祭りとなりました。娘「シトナイ」は愛犬を引連れ懐には「マキリ」を隠し余市の「コタン」なる我家を立出でました。送る人々に別れを惜しまれて祝津の赤岩山へと指して行きました。丁度夕景に其麓に到着しました。まだ十五夜の月は出ませんのを幸と暗に乗じて数十丈の岩壁を犬と共に何んの苦もなくよぢ登り、彼の大蛇の棲むと云ふ洞窟へ參りまして携ふ處の熊と鹿の肉を洞窟の入口に供へました。自分は岩蔭に身を忍ばせ様子を窺ふて居りました。十五夜の滿月はそろ〳〵と登り初めたので山も海も手にとる様に見渡すことが出来ます。彼の「シトナイ」今や遲しと大蛇の出るを待つて居りますと、間もなく天地も崩れん計りの響きをなして大蛇は大頭を振りあげ二つの眼は太陽の如く光を放ち、穴の口に出て來て供へてある肉を嗅ぎ大口を開き、舌鼓をうつて熊の肉を一口に喰ひ盡し、第二の鹿の肉に喰ひかゝりました。岩蔭に隠れ居たる娘「シトナイ」は様子を見すまして犬を放ちました。犬は忽ち一聲高くあげまして大蛇に飛び付きしばしの間は爭ふて居りましたが遂に犬は大蛇の咽喉に嚙付きましたが、間もなく大蛇は數ヶ所の痛手に堪へ難くさすがの大蛇もとう〳〵倒れてしまひ亡き体（がら）を曝しました。

娘「シトナイ」は隠し持つたる「マキリ」を抜き放ち大蛇の洞窟へと入り、前に喰はれた八人の娘の髑髏を取り出しまして一纏となし此を背負ひゆう〳〵と山を下りまして余市をさして夜明に歸りました。以來大蛇の害を免れましたが村人は後の祟りを恐れまして此洞穴に白龍大權現として祀り今も尚ほ崇敬して居ます。村人が夜長の昔噺しとして居ります。

三．一．橋本 尭尚（はしもとぎょうしょう）について

橋本尭尚（一八六四～一九三五）は『小樽の人と名勝』と「橋本尭尚関係文書」[19]によると京都の蔵人の出身で一時は蔵人見習に就いたが、諸官制改廃に伴い蔵人も廃止された。明治十三年北海道開進会社測量生徒として北海道に来道。以降、公職を点々とする中「埋れている北海道の史実に対して非常に興味を持ち始めた」[20]とのことである。明治三十二年（一八九九）、専売局職員として小樽に赴任した。

大正十三年小樽図書館では館長・河野常吉を含む十五名の有志が忍路・余市の遺跡調査に出かけたことを契機に「郷土愛に強い関心を持った人達によって「小樽郷土研究会」が誕生[21]したという。この研究会に橋本が所属していたのかは不詳だが、

測量の技術を持ち、北海道の史実に興味があった橋本が参加していてもおかしくはない。

橋本は大正十四年一月、小樽市から市史編纂係りの嘱託を受け、この頃に「小樽史談会」を結成。大正十五年十月から十一月にかけて、橋本が結成した「小樽史談会」後援の「郷土志料展覧会」なるものが小樽図書館で催され、開催中には「郷土講演会」という題名で橋本が小樽市民に向けて講演を行っている。

三．二．橋本の「シトナイ伝説」との比較

橋本の「小樽の昔噺」が掲載された『北海道郷土史研究』は昭和六年（一九三一）五月に日本放送協会札幌放送局（ラジオ）で放送した教養放送「郷土史研究講座」[22]を元に出版した書籍である。橋本はこの中で二話のアイヌの伝説を発表しているが、後半の一話が「シトナイ伝説」である。

橋本による「シトナイ伝説」は『捜神記』とも【A】青木とも異なる部分が多い。だが舞台を小樽とする点、主人公が生贄として志願する際の台詞「我家には不幸で男兒がなく女の子ばかり九人あつても何んの役にも立ちません。無いも同然です。生きて居る甲斐もありません」と言う点、生贄になることが決まった際の娘の様子として「思ふ仔細ありと見へ」という点、犬を放った後で自らも突き刺す描写が削除されている点など【A】青木を参考にしたことが見て取れる。

【B】捜神記【A】青木【C】橋本訳には、娘が誰から武器と犬を譲り受けたかは描写されていない。娘を止めることができなかった父母が武器などを与えたとは考えにくい。しかし、橋本の【第二話】では「娘の「シトナイ」は思ふ仔細ありと見へ父に乞ふて切味良き「マキリ」と父が獵につれ行く犬を借り受けました」と、【B】【A】【C】にはない「武器と犬を父から譲り受ける場面」が追加されている。

橋本は【A】青木が【C】松井訳をそのまま引き写したものであることに気付かず、娘が「マキリ（アイヌ民族の小刀）」を譲り受けているのだからそれを渡したのは父親だと思ったのだろう。

いずれにせよ、橋本は登場人物にアイヌ風の名を付け、「茲に余市のアイヌ人の酋長に「ウヘレチ」と云ふものがありました。男の子がなくて九人の女兒がありました。その九人目の女の子名は「シトナイ」と云ひ」としている。先に述べたように北海道庁の『北海道の口碑伝説』と【A】青木も「娘」とだけ記していて「シトナイ」という名前は登場しない。この「シトナイ」という名前はどこから来た名前なのだろうか。

三．三．「白龍権現」

橋本による【第二話】は直接関係のない歴史的事実や実在した人物を組み込んで具体性を増してあるのが特徴である。話の冒頭にある赤岩山については「岩窟に白龍権現が祭つてありま

す」と記している。この赤岩山の白龍権現とは、明治二十年（一八八七）北海道に真言密教を伝えに来道した「鷹尾了範（たかおりょうはん）」[23]の伝説であり、アイヌ民族とは関係ない。なお、北海道庁『北海道の口碑伝説』の高島町の項目に「赤岩洞窟の行者」として白龍を見たという男の話と「高尾了範」の名前が記されている。

三．四．「小樽の昔噺」の登場人物

橋本の「小樽の昔噺」には「アイヌの伝説（昔話）」として「シトナイ伝説」を含む二話が収録されている。橋本は【第一話】冒頭「これより小樽の昔話に取りかゝります」と語り出し、【第二話】では一転「尚一つ伝説の御話しを致します」と語る。「昔話」と「伝説」の両方を用いており、この二つを区別するような説明は無い。

第一話は「ケフラケ」という男性とその息子「ニシカ」、息子の妻「ペチカ」という名前のアイヌが登場する。第二話では「ウヘレチ」という男性とその娘「シトナイ」が登場する。彼らのうち「ペチカ」を除く「ケフラケ」「ニシカ」「ウヘレチ」「シトナイ」はいずれも小樽と余市に実在したアイヌの名前である。だが必ずしも彼らの生きた時代や地域が史実と合致するものではない。

以下、第一話の冒頭を記載する。

【第一話】橋本堯尚「小樽の昔噺」より第一話冒頭部[24]

これより小樽の昔話に取りかゝります。年代は判然としませんが未だ一人の和人（シャモ）も住んでをりません頃ですから今より約二百六十年程前のことです。小樽がまだ「クツタルシ」「アイヌ語譯虎杖草」と稱しました。今の入舟町は川下で小高い濱邊前は渺々たる海原茲に穴を掘り丸木を柱として住んで居た親子二人の「アイヌ」人が居りました。父親の名は「ケフラケ」七十歳以上の老人其風采は堂々たるものです。その筈彼は元東蝦夷地沙流（サル）に住み同地の酋長と尊敬されて居ましたが、かの有名な蝦夷の大亂とも云ふべき國縫の大戰に參加し松前軍を惱ましたが松前軍のため内地より援兵が多く來り、又彼等が奸策に陥り敗軍となり止むなく再擧を計らんと此「クツタルシ」に落ち付き風雲の來る時節を待つて居りました。併し寄る年波に身体不自由でありました。此處に一人の息子名は「ニシカ」と呼び至つて親に孝養を盡し父にもをとらぬ勇敢な若者がありました。

三．五．「物語」と実在のアイヌたち

「ケフラケ」と「ウヘレチ」は「シャクシャインの戦い」[25]（一六六九年）に参加した余市アイヌの名前であり、「ニシカ」と「シトナイ」は十九世紀に開拓使によって東京留学させられた小樽アイヌの家族の名である[26]。その中でも「シトナイ」は小樽の惣乙名（そうおとな）（役職名）、地域アイヌの最有力者であり、北海道大

学北方資料『明治元年明治二年小樽高島明細書』にその名前を見ることができる。[27]

【第一話】では「二百六十年程前のこと」「國縫の大戰」と記していることから史実の「シャクシャインの戦い」のことを指していると思われる。「ケフラケ」をシャクシャイン戦争に参加した者として語る点では史実に即しているといえる。だが、「ニシカ」は十九世紀の人物の名であり「ケフラケ」の息子ではありえない。また、同じく「シトナイ」も十九世紀の人物の名であり、シャクシャインの戦いに参加した「ウヘレチ」の娘ではありえない。

アイヌ民族の命名規則によると同じ地域では同じ名前を付けない。[28]したがって同名の別人がいたということも考えにくい。最後に残った「ペチカ」であるが、これは下敷きとなった永田耕作の「夜光の珠か魔神か」からそのままとったものである（永田耕作も青木純二もペチカの夫の名はニシカではなく「イサヤコ」としている）。

三・六．橋本による「創作アイヌ伝説」

橋本による「小樽の伝説」の【第一話】は、青木純二『アイヌの伝説と其情話』の「夜光の珠」に実在のアイヌの名「ケフラケ」「ニシカ」をはめ込んで書き直したものである。

青木はこの「夜光の珠」の出典を「海の伝説と情話より」と明記しており、引用関係は明確である。『海の伝説と情話』[29]の「夜光の珠か魔神か」は、永田耕作という和人の小説であり、アイヌが伝承していた伝説ではない。非アイヌ民族の日本人による「創作アイヌ伝説」である。

橋本が『アイヌの伝説と其情話』と『海の伝説と情話』のどちらを参考にして【第一話】を執筆したのかは不明だが、いずれにしても元は「創作アイヌ伝説」である。

【第二話】である「シトナイ伝説」も同じく、【A】青木に小樽・余市の歴史上の実在のアイヌの名「シトナイ」「ウヘレチ」をはめこんで書き直したものである。

橋本が小樽に赴任する頃には小樽アイヌはすでに浜益村に移住させられた後であり、郷土のアイヌ伝説ついて知るには青木の『アイヌの伝説と其情話』しか見つからなかったのかもしれない。

三・七．『捜神記』松井等訳から「シトナイ伝説」への変更点

松井等が訳した「妖蛇」から青木による「大蛇を殺した娘」、そして橋本による「小樽の昔噺」に至るまでのアイヌの風俗、あるいは日本語表現に合致させるために改変させた箇所を要約する。【C】松井→【A】青木→橋本【第二話】の順に次の通りである。

【C】松井

〈舞台〉東越の庸嶺という高山の西北の裂け目

〈大蛇の大きさ〉長さ七八丈、大さ十圍

〈大蛇の要求〉十二三歳の無垢の乙女

〈供物〉牛羊

〈主人公の住処〉將樂縣

〈主人公の父〉李誕

〈主人公〉六人姉妹の年若の寄

〈武器〉剣

〈大蛇の姿〉頭は困ほどもあり、眼は二尺の鏡の如く

【A】青木

〈舞台〉小樽手宮の山の西北の裂け目

〈大蛇の大きさ〉長さ七八丈、大さ十圍

〈大蛇の要求〉十二三歳の無垢の乙女

〈供物〉牛羊

〈主人公の住処〉イワナイ

〈主人公の父〉イワナイの酋長（名前無し）

〈主人公〉六人姉妹の年若の娘（名前無し）

〈武器〉マキリ

〈大蛇の姿〉頭は困ほどもあり、眼は二尺の鏡の如く

橋本【第二話】

〈舞台〉小樽の西北一里位祝津の赤岩山

〈大蛇の大きさ〉長さ七、八丈胴の太さ二斗樽位

〈大蛇の要求〉十四五歳の無垢の處女

〈供物〉熊鹿

〈主人公の住処〉余市

〈主人公の父〉ウヘレチ

〈主人公〉九人姉妹の末のシトナイ

〈武器〉マキリ

〈大蛇の姿〉大頭に二つの眼は太陽の如く光を放つ

物語の舞台は中国から小樽へ変わり、白龍権現伝説のある赤岩山へと移った。

大蛇の大きさはわかりやすい日本の単位になり、生贄の年齢は十二～三歳から十四～五才に変わった。大蛇に供えた品は牛羊からアイヌ民族風に熊鹿に変わり、登場人物の住処も中国から北海道のイワナイ、そして余市に変わり、人の名前にはアイヌの名が付いた。大蛇を倒す武器は剣から大蛇を切り倒すには不向きであろうマキリ（小刀）になった。大蛇の頭の大きさを表す際に、日本やアイヌ文化にはない困（まるぐら）（中国の穀物庫）という表現は削除された。

四．「創作アイヌ伝説」

アイヌ民間説話の研究活動は金田一京助、久保寺逸彦、知里真志保らによるものが知られている。阿部敏夫は創作アイヌ伝

説「紅スズラン」を例として、大正から昭和にかけて青木純二を含む新聞人らによって作られたアイヌ文化の伝承がない「アイヌの民間説話」が地域に伝承されてきたかのような現状を指摘している。[30]

「紅スズラン伝説」や「シトナイ伝説」のような非アイヌ民族の日本人による「創作アイヌ伝説」は研究対象になりにくい。アイヌ口承文学者の丹菊逸治はアイヌの伝説と言われている「白蛇伝説」に対して「この手の「アイヌの伝説」の元ネタ探しについては、アイヌ関連の研究者はあまり興味を持たないので、そもそも研究自体が少ない[31]」と語っている。本稿で取り上げた「シトナイ伝説」等の伝承者がわからない伝説について、研究者たちはアイヌの口承説話として研究をしていない。疑わしいと気づいていても、「怪しげな伝説」の研究は積極的ではない。それは偽史の類全般に言えることだろう。

いつどこで誰から聞き取ったのかわからないが、「アイヌの伝説」であるとして地域に定着した「創作アイヌ伝説」はその全貌すらわからない。しかし、「シトナイ伝説」や「紅スズラン」からわかるように、アイヌ民族や文化を軽視した姿勢で作られた伝説に「創作アイヌ伝説」があり、それは二〇二〇年の今も変わることなく「伝説集」等で受け継がれている。

おわりに

大正から昭和にかけて作成された「創作アイヌ伝説」はその評価が十分になされないまま今に至り、その一部である「シトナイ伝説」はソーシャルメディアゲームに登場するまでになった。インターネットでは古い資料ほど閲覧できるようになり、誰でも簡単に利用することができる。本稿でも国会図書館オンラインや Internetarchive などのウェブアーカイブを利用している。

国は文化資源が地方創生、観光振興に寄与することを期待している。二〇二〇年七月十一日「国立アイヌ民族博物館」通称「ウポポイ」が開業した。「ウポポイ」もまた観光の起爆剤となることが期待されている。然るに「創作アイヌ伝説」に関する研究が未だ途上にあり、半ば放置されていることに筆者は危機感を覚える。

今回その一部である「シトナイ伝説」の作成過程が特定でき、アイヌの口承説話ではないことを指摘できたことにより、アイヌ文化の安易な「フリー素材」利用と「アイヌ伝説」利用に対して今一度問い直す必要があるのではないか、「シトナイ伝説」を通じて一石を投じることができるのではないかと思い、筆者はこれを報告するに至ったのである。

注

(1) 「英語版『Fate/Grand Order』オーストラリア・シンガポール・フィリピン・ベトナム・タイの五か国に配信地域を拡大」『DELIGHTWORKS ニュースリリース』https://www.delightworks.co.jp/news/20180419-1442『Fate/Grand Order』は日本国内版を二〇一五年七月に配信を開始し、海外向けには、簡体字版を二〇一六年十月に、繁体字版を二〇一七年五月に、北米地域向け英語版を二〇一七年六月に、韓国語版を二〇一七年十一月に、それぞれ配信を開始した。(二〇二〇年八月十二日最終確認)

(2) 二〇一八年七月二十五日『Twitter』にて『捜神記』の「李寄斬蛇」が元ネタだろうと指摘があった。
二〇一八年七月二十六日、中国の大型電子掲示板『NGA玩家社区』にてこの神話は『捜神記』の「李寄斬蛇」にあまりにも似ていると指摘があった。

(3) 脇哲『新北海道伝説考』一九八四　北海道出版企画センター　一七九～一八四頁

(4) 斉藤大朋「『北海道の口碑伝説』とは何か」『北海道地域文化研究』八　二〇一六　北海道地域文化研究

(5) 青木純二『アイヌの伝説と其情話』一九二四　富貴堂書房　二一〇～二一二頁

(6) 中川譲『文章類似度算出（速攻ハック版）』https://ofo.jp/similarity.php 2015
KAKASI project http://kakasi.namazu.org/index.html.ja によって漢字仮名まじり文をひらがな文やローマ字文に変換した後、PHP の similar_text https://www.php.net/manual/ja/function.similar-text.php を実行し、二つの文字列の間の類似性を計算しパーセントで示したアプリケーションである。「コピペの改竄程度の場合は、七〇パーセントを超える数字が出ると思われます」とのことである。

(7) 注（3）に同じ。

(8) （東晋）干宝『捜神記』十九巻（文瀾閣四庫全書版、浙江大学図書館所蔵、Internet Archive［https://archive.org/details/06050852.cn/page/n182/mode/2up］一八三～一八四頁（二〇二〇年八月十四日最終確認）

(9) 松井等『伝説之支那』一九二二　楠林書店　二一～二四頁

(10) 勝山稔「近代日本に於ける中国白話小説「三言」の受容について：新たに発見された松井等の事例（一九二二年）を中心として」『国際文化研究』二〇　二〇一四　東北大学国際文化学会

(11) 干宝（竹田晃訳）『捜神記』二〇二〇　平凡社ライブラリー　五六九～五七頁

(12) （元）王禎『農書』十六巻（文瀾閣四庫全書版、浙江大学図書館所蔵、Internetarchive［https://archive.org/details/06049872.cn/page/n112/mode/2up］二〇二〇年八月十七日最終確認）

(13) 櫻井美紀「「大工と鬼六」の出自をめぐって」『口承文芸研究』一一　一九八八

(14) 阿部敏夫「大正期におけるアイヌ民話集／北海道の義経伝説

とアイヌ」『平成十四年度普及啓発セミナー報告』二〇〇三

(15) 新聞研究所（編）『日本新聞年鑑　大正十四年版』一九二五　新聞研究所　第四編　七〇頁

(16) 二〇一七年四月六日、『Twitter』にて知里幸恵『アイヌ神謡集』内の六話と同じ内容、同じ順番で掲載されていると指摘されている。

(17) 「著作権Q＆A」公益社団法人著作権情報センター https://www.criic.or.jp/qa/hajime/hajime1.html「民話、伝説など地域に伝承される話の大筋はそのままで、枝葉において多少の修正増減を加えただけのような場合は、そこに新たな創作性は認められず、新たな著作物ではありません」（二〇二〇年十一月四日 最終確認）

(18) 札幌放送局『北海道郷土史研究』一九三二　日本放送協会北海道支部「小樽の昔噺」三六〇～三六二頁

(19) 北海道庁『北海道立文書館所蔵資料案内～私文書』「橋本尭尚関係文書」http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/nmj/d/guide/b/h/hasimotogyousyou.htm（二〇二〇年八月二十一日最終確認）

(20) 洛西橋本尭尚　天民阪牛祐直『小樽の人と名勝』一九三一　小樽出版協会　二一六～二一八頁

(21) 藤島隆「小樽図書館の設立過程と活動について」『北海学園大学学園論集』一二九　二〇〇六

(22) 日本放送協会『ラヂオ年鑑　昭和七年』一九三二　日本放送出版協会

(23) 小樽高野山日光院『日光院案内』http://r.goope.jp/nikkouinn/menu（二〇二〇年八月二十一日 最終確認）

(24) 注（17）三五六頁

(25) 弘前市立図書館『津軽一統志』一七七六

(26) 河野本道（選）『第二期アイヌ史資料集』六一九八一　北海道出版企画センター

(27) 北海道大学北方資料データーベース『明治元年明治二年小樽高島明細書』五二頁

(28) 遠藤匡俊「一八〇〇年代初期のアイヌの社会構造と命名規則の空間的適用範囲」『地理学評論』七七（一）二〇〇四

(29) 朝日新聞社 編『海の伝説と情話』一九二三　朝日新聞社

(30) 阿部敏夫『北海道民間説話〈生成〉の研究：伝承・採訪・記録』二〇一二　共同文化社

(31) 丹菊逸治（@itangiku）二〇一九年四月二九日『Twitter』

（ひつじ・ようこ／アイヌ文化研究家）

【第七七回研究例会　野村純一論―その研究手法と業績―】

研究例会報告

山田　栄克

二〇一九年十月二十日、第七七回研究例会としてシンポジウム「野村純一論―その研究手法と業績―」を國學院大學院友会館で開催した。

野村純一（一九三五年～二〇〇七年）は本学会創立から尽力し、多くの研究成果はもちろん、その方法についてもまだまだ発見が多くある。司会を務めた私もその研究のすべてを理解できているとは言えないが、その足跡と成果からの可能性は未だ広がりを見せているように思われる。特に昨今、昔話は社会の大きな変化に伴って担い手が「伝統的な語り手」から「新しい語り手」となったと言っても過言ではないほど、その伝承母体及び、その性質を変化させている。それは昔話だけではなく、伝説ですらもそうであるということをフィールドワークをしていると痛感する場面が多くなった。そういった伝承が大きく変化していく過渡期に昔話の調査及び研究の第一線で功績を残した野村の成果や方法を整理することが学界に寄与するであろうという思いで、この例会を計画した。

パネリストには、野村と同じ時代に國學院大學を研究拠点としており、『野村純一著作集』（全九巻）の編集責任も務めた小川直之氏から民俗学、文化学の視点から、野村の著書『新・桃太郎の誕生』（二〇〇〇　吉川弘文館）刊行と同時期に桃太郎を伝説として研究していた齊藤純氏、野村の教えを直接受けた常光徹氏から発言をいただいた。詳しくはこのあとに続く論考の中で述べられているので、ここでは当日に私がとったメモからその内容を振り返りたい。

小川氏は「口承文芸の文化学―野村純一の視座―」と題し、野村の業績について、国際研究の土台作り、口承文芸、特に昔話を芸能などと関連付け、そして昔話には作法（規律）があることが人文学の学問対象であるということを担保していることを明確にしたと指摘した。そして語りの時空論を明らかにし、現場を理論にしていった過程に述べた。

齊藤氏は、「遠望する野村純一―物語と「もうひとつ」の発想―」と題し、研究を志したころの書籍からの、そして桃太郎論からの野村についての発表であった。野村の名前は『民俗調査ハンドブック』（一九七四　吉川弘文館）や『民俗研究ハンドブック』（一九七八　吉川弘文館）などの研究者の入門書で若手の導き手だけではなく、『別冊歴史読本』（一九八三　新人物往来社）のような大衆的な読み物にも見られることから、大衆的・庶民的な姿勢も持ち合わせているとした。そして研究者が多くの事例に当てはまるように抽象的な表現を行うのに対し、